



歌うように話す

林 望 Hayashi Nozomu

恥ずかしながら、高校生のころ英語は不得意の科目の一つだった。どうもあのただ模範解答を暗記するだけのような受験英語が好きになれなかったのだ。とはいえ、英語自体は決して嫌いではなかった。

今から四十年も昔、当時はモダンフォークソングが大流行で、ブラザーズフォーやPPMなどの名手たちの全盛期だった。私はたちまちPPMの歌の虜となって、かれらのコピーを試み、ギターを弾き、ハーモニーを聞き取った。今思うと、あの歌の勉強が、私のその後の英語を大きく規定したのである。

それから二十年ほどのち、私は、縁あってイギリスへ留学することになった。当時の私は純然たる日本古典の文献学研究者であって、英語にも英国にも毫も興味がなかった。友人たちのなかには、英会話の学校に行けとか、リンガフォンでも聞いて勉強しろとか、あれこれ助言してくれる人があったが、私は何故かそんな必要はないような気がした。

さて、いざイギリスに単身渡ってみると、もちろん最初は全然なにも分からない。しかし、よくよく聞いてみると、英語にも高雅なのと粗野なのがあることがすぐ分かった。母語にうるさい人間は外国語にも敏感なのであろう。そこで、どうせ学ぶなら格調高い英語をまねて学ぶに如かず、とそう考えた。

すると、ロンドンではロンドン大学の碩学ローゼン博士の家に下宿し、ケンブリッジでは名高い作家ルーシー・ボストン夫人の館に、偶然住むことになった。つまりそういう幸いが私にあったのであろう。

このとき、よく聞き、よくまねる、というPPMで培った能力がどれほど役に立ったかしれぬ。

そもそも英語の歌は、英語が本来もっているイン

トネーションや、強弱のリズム（詩のタームでいう metre）に極めて忠実に作曲されている。それはクラシックでもポピュラーでも変わらない。そうして個々の語の発音よりもそういう全体の流れの抑揚やリズムが英語を英語らしく話す要諦なのである。

私はPPMをまねるうちに、そのことを自然に身につけたのであつたらう。だからイギリスに渡って、上流イギリス人の英語を子細に聞き分けて、英語を英語らしく話すことが別に難しくもなくてできた。

イギリスに渡って半年もすると、いつのまにか相当のスピードで話せるようになったが、そういうことのためには、この「歌うように話す」ということが実際にはずいぶん役に立った。

思うに英語の授業でも、美しいイギリスの歌曲や民謡をピーター・ピアーズ、イアン・ボストリッジ、トマス・アレン、などの名手が歌っているのを聞いて忠実にまねるとか、アメリカ英語だったら、やはりPPMのようなもっとも標準的で上品な（！）東部米語を「お手本」としてまねて歌ってみるとかするとよい。歌は楽しいから、暗記も全然苦にならぬ。ただただ楽しく歌っているうちに、すいすいと英語の発音やらエロキューションなどまで身につけてしまおうと、私は思うのだが、ただしそれで受験に受かるかどうかは、保証の限りでない…。

はやし のぞむ

1949年生。作家・書誌学者。『イギリスはおいしい』で日本エッセイストクラブ賞、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』で国際交流奨励賞を受賞。エッセイ、小説、詩、能楽等、著書多数。最新刊『おちさん—The Man—』。http://i.am/rymbow